2015 年度第 2 回学部評価会議報告

■概要

日時：2016 年 2 月 24 日（水）19：00～20：30

場所：Galleria 商.Tokyo(丸の内サテライトキャンパス)

■学部評価会議　参加者

池田 博義 氏

マイツグループ 代表取締役統括社長

※以下、五十音順

浅川 潤一 氏

千葉商科大学付属高校　教頭

有沢　正人氏

カゴメ株式会社　執行役員　経営企画本部人事部長

五島 勝也 氏

バニラ・エア株式会社 代表取締役副社長

須田 秀伸 氏

千葉県高等学校教育研究会 国際教育研究部会長

土田 博幸 氏

内外日東株式会社 管理部 人事研修チーム チーム長

宮内 史絵 氏

株式会社フィナンシャル・エージェンシー 業務本部 CSC 部 担当部長

保永 年貞 氏

株式会社ジェイコム市川　代表取締役社長

■本学関係者

宮崎　緑　国際教養学部学部長

柏木　将宏　教授

山田　武　　教授

鈴木　恒雄　教授

久保　裕也　准教授

太田　昌志　准教授

ムズラックル・ハリト　専任講師

学生のやる気を引き出すために

・海外フレッシュマンキャンプにより学生がモチベーションを上げ、そこから 4 年間の学びがスタートできたことは評価できる。その後、モチベーションを保てずにいる学生については、学生自身が改めて目標を立てることを大学がサポートすることで、学生のモチベーション維持につながるのではないか。
・英語を勉強すること自体が目的ではなく、英語を用いて世界とコミュニケーションを取ること、英語を用いて何をするのか、ということが本学部の最大の売りであり、武器といえる。しかしながら、英語ができなければその目的は果たせないため、TOEIC スコアの目標を立て、自分を追い込み厳しく勉強させていくことも必要ではないか。その先に、どのような興味、関心を抱くのかは学生自身である。
・中国語においては少人数クラスによる教育が、HSK 試験で一定の成果を収めることができたのであれば、英語についても同じような勉強法を取り入れるのが良いだろう
・意欲の高い外国人留学生が在籍することにより、クラスが国際化され、日本人学生にとっても学修効果が期待できるはずだ。外国人留学生の入学枠を設けてみてはどうか。
・高校生は、グローバルを理解する機会が少ない。グローバル人材は、世界を舞台に日本を牽引するような人材ばかりでなく、日常的に海外の人々と関わる仕事に従事する人材など、幅広いものである。高校生が身近に感じるグローバル人材も養成できる学部であるべきで、大学が目標とする人材と学生がめざす人材にミスマッチが生じないようにしていくのが良いだろう。
・学生は、何か興味のあること 1 つをきっかけに学びへのモチベーションを高めることができるのではないだろうか。特色である少人数教育は、実は裏目に出るということはないだろうか。地元出身の学生が多く、少人数教育であるが故、いつも周りが変わらない環境に置かれることで、視野が狭くなってしまうことが懸念される。外国人留学生との交流やグローバルに活躍されている方の講演を聴くなど、視野を広げ、やる気を出させる工夫をする必要があるのではないか。
・目標の大切さを感じる。社内の取り組みとして、短期（3 ヶ月スパン）でのプロジェクトを推奨している。グループで目標を立て、ディスカッションを行いながら、個人を成長させることが目的のプロジェクトである。大学でも取り入れてみるのが良いのではないか。
・もしも今モチベーションを持てない学生がいるのだとしたら、学生が、なぜ国際教養学部を選んだのかという根本を探ることが急務ではないだろうか。学生が抱く興味と学部の教育方針のギャップを分析し、学生のモチベーションを向上させる必要があるのではないか。

社会に出るまでに身につけておくべきこと

・企業が求める人材の中でも、TOEIC のスコアは非常に重要な指標である。近年、TOEIC に代わり大手企業や商社で採用されている CASEC を本学部でも導入してはどうか。CASEC は、Speaking についてのレベルチェックが可能である。海外での会議では、まずは話せないと意味がない。

・学業成績については、GPA3.2 以上がインターナショナルスタンダードである。特に入社後に MBA 取得など大学院へ進学することを目指すとすれば、必要最低限の成績基準である。

・開設初年度で先輩がいないという環境は、学生にとってハンデだったのではないだろうか。社会に出れば縦社会の対応が求められるが、縦社会を知る有効な手段がサークル・部活動であり、採用面接においてもサークル・部活活動については必ずといっていいほど問われることである。上下関係の基本をどのように大学生活の中で身に付けるかという点も、フォローしていく必要があるのではないだろうか。

・海外インターンシップは良いことだが、日本企業においても、様々な国の方が一緒に働くという環境でグルーバルを体感することはできるはずだ。

・最近の傾向として、グループワークを苦手とする学生が多いと感じている。社会に出たら意見を取り交わすことが必須のため、グループワークは引き続き実施するべき。また、キャリアデザインを学ぶ講義では、業界や職種の研究を行い、社会を知ることが重要である。インターンシップも有益だが、まずは自分で情報を得て、判断軸を持つことで、自分のキャリアをデザインしていくことができるのではないだろうか。

今後への期待

・ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーを明確にして、学部としてどのような人材育成に取り組むのか明確に打ち出していくのが良いだろう。また、入学後の学生がどこまで成長できたのか、教育の可視化が求められている時代とも言える。

・これからの時代、求められる人間力が変化することは間違いない。過去の教育スタイルでは、これからの時代のニーズに適した人間力の育成が難しいのではないだろうか。また、大学での学びの根本は、強制ではなく自発的な学びであり、学生自身が目標を自覚させられるような教育を行ってもらいたい。